

海外研修レポート

- 研修日時：H 2 1 年 3 月 1 5 日 ~ H 2 1 年 3 月 1 7 日（2泊3日）
- 研修先：中国 上海市中心部

- 視察日程：
 - 1 日目（3/15）：ガイドによる視察説明
上海市住宅環境視察
上海高齢者職場訪問（指圧マッサージ店見学）
 - 2 日目（3/16）：上海市徐匯区第二社会福利院視察
上海市第一社会福利院視察
浦東地区視察
 - 3 日目（3/17）：外灘地区視察（高齢者等が集まる公園）
豫園地区視察

H 2 1 年 3 月 3 0 日
社会福祉法人ケアネット

上海の福祉 背景と概要

特別養護老人ホームやよいほうむ 介護リーダー

1、上海の町並み

今回初めて上海に行かせて頂き、私たちがイメージしていたものとは全然違いそのギャップに衝撃を受けた。

高層ビルが立ち並び、万博に向けあちこちで工事が行われ、上海のメインストリートには公休ブランドショップが並んでおり、豫園（よえん）という観光名所は観光客で賑わう東京の浅草のような、中国の伝統的な建物が並んでいる。また、上海は外国人がとても多く、各国の企業が集まる街はその国独特の建物が立ち並び中国にいることを忘れてしまいそうな通りもある。

しかし、一步路地へ入ると、お世辞にもキレイとはいえない集合住宅が所狭しと並んでおり、中には共同のトイレと、流しが一ヶ所づつ設けられて約5～6世帯が住んでいる。間取りは1K約10畳程。その部屋に家族みんなで住んでいるそうだ。上海には人口に見合った住宅用の土地が少なく、ほとんどの人たちが集合団地に住んでいるという。

2、上海老人人口率

上海市には60歳以上の老人が266万人、上海人口全体の20%を占め上海の高齢者人口は毎年6万人増加している。このまま増え続けると2025年には全体の35%を占めることが予想され、上海も日本と同様な状況、高齢化社会に直面している。

3、政府との関わり

前文でも述べたとおり、上海は高層ビルの建設が盛んになっており政府は土地の確保に力をいれている。そのため市内の部屋（家）は狭く老人のベッドの確保が困難な状況である。そこで中国政府が市外へ老人施設を作り、今まで老人たちが住んでいた上海市内の家を政府が買い取り、そのお金を補助金という形で老人たちへ渡し半ば強制的に市外の老人施設へ入れてしまう、（移って頂く）という仕組みになっていたという。施設にいる老人たちはほとんどが仕方なく施設へ入っている、という状況であることがわかる。また団結力の強い中国は、家族を施設に入れるなんて考えられない・・・という考えが強いようだが、政府との関わりの中で家族もいろんな葛藤があるのだろう。知り合いもいない市外へ連れてこられる事による「老人の孤立」、そしてやはり「食の問題」老人たちにどうやって安全な食事を提供するか、が大きな問題となっているようだ。

4、介護

上海では「介護」の認知が低く、「介護」自体が確立されていないという。
一般的に、認知症や、片麻痺の老人 病院（Ns）

老人 施設（？）

という考えがまだ市民の間では強いという。

5、施設

中国は介護度が、重度・1級・2級・3級の4段階にわかれており、施設では重度の老人を優先的に受け入れしている。

中国の施設は、1市レベル 2 区レベル 3 民間社会レベルに分かれている。1, 2の市区レベルは政府がお金を出しており、1は大体90%以上を政府が出しており、2は40%が政府60%が民間でお金をだし経営している。その為市レベルは大規模なサービスを展開しているという。しかし、介護保険制度がない格差が大きい中国の現状は物価の違いも含め入居料金を考えると、やはり施設に入所できる利用者はお金持ちが多いようだ。

6、デイサービス

上海にはデイサービスはあるがまだ数少ないという。

その変わり、集合住宅や団地等一つの町内会にデイサービスの役割をしている事務所があり、それぞれ別々の会社で運営しているようだ。その町内会も政府が仕切っているとのこと。

一つの町内会に各々1デイサービス（事務所）。老人に専用の電話を渡し、緊急時にはそこのスタッフが駆けつけるシステムになっている。又、事務所の中に日本と同様のスタイルのデイサービスもあり、老人が集まり娯楽を楽しむ場があるところもあるようだ。

7、最後に・・・

前文の3、政府との関わり、で土地確保の為・・・と述べたが、最近では発展に伴い状況が変わり高齢化社会による施設の需要が増えた為、上海政府（施設）は90%家庭、7%デイサービス、3%施設という目標を掲げているという。{9:7:3}

介護度1級2級3級の方は家で過ごしてほしい、というのが政府の考えであるというが、上海の住宅環境、格差を考えると、まず中国国民の「介護」の認知が必要だと感じる。

上海市第一社会福利院を視察して

老人デイサービスふじみ苑
相談員

【はじめに】

まずは、今回の上海研修は私にとって、得るべきものがとても大きく、国際的視野を通して、これまで介護に対し固執していた自分の考えや見方を改めて見直し、変える大きなきっかけとなった。この機会を与えて下さった、理事長をはじめ、ケアネットの上司の方、同職員の方に感謝とお礼を申し上げたい。

数か所の施設や建物を視察させていただいた中で、私の報告書として 上海市第一社会福利院について 上海市のデイサービス機能について述べさせていただきます。

上海市第一社会福利院を視察して

< 上海市第一社会福利院の概要 >

まずは、第一社会福利院の概要について述べたいと思う。

第一社会福利院は、1964年設立され、上海市の中でも歴史が古い施設である。施設運営費用は、中国政府から出ていて、その為、政府の厳しい管理システムと上海市の管理システムの下で、国営として経営・運営が行われている。

上海の中でも特に中国政府が力を入れている施設の中の一つで、先進的な設備を導入しており、環境面の充実度や職員の質等で最高級レベルの施設である。いわば、一般的な上海の高齢者施設というより、全国的にも地名度の高い理想的なモデル施設といった所が、ここ上海市第一社会福利院である。

施設には、190床のベッド数に194名の入居者が入所されている。施設の入居条件としては、ある一定以上の財源があり、且つ、介護の必要な障害のある方、もしくは子供のいない60歳以上の高齢者である。

現在の入居者の平均年齢は84歳で、その60%当たる方が介護の必要な障害のある方で、後の40%は、障害度が軽いが子供のいない方という内訳になっている。

職員は総勢で150名が働いており、そのうち、医師10名、看護師10名おり、医療面で万全の体制を整えている。また、入居者3人に対し2人の介護職員が付く事になり、かなり手厚い人員配置と言える。さらに、この施設で働く職員は、国で決められた特別認可を持った、ある一定以上の資格を所持している職員で、その為、職員の質もハイレベルを保っているとの事であった。

業務体制としては、医療、介護、調理、事務の部門毎に、仕事内容の区切り

がはっきり決められ、各部門で事細かに決められた業務マニュアルが存在し、職員はそのマニュアルに沿って業務に取り組み、業務の統一が保てるよう管理されている。

以上が上海市第一社会福利院の概要である。

第一社会福利院の視察を終えて

第一社会福利院に到着し、まず、目に飛び込んできたのが、中国語でおそらく「日本のケアネットの皆様、歓迎！！」と書かれている玄関の自動ドア上にある電光掲示板だった。一見、高齢者施設というより、高級な上海のホテル思わせる玄関を通り、施設内に入った。もうこの時点で、ここがいかにか先進的な施設であるかが伺い知ることができた。

施設見学をする前に、施設長、フロアー長、調理長の方が出てこられ、話を伺える場を設けていただいた。

そこでは施設の理念についての説明があった。第一社会福利院のすべてのサービスの基本理念として挙げているスローガンが、「老人の為にすべてを捧げよう。」で、その為に老人を尊敬し、責任感を持って仕事をする事だそうだ。

と、ここまでは、日本も同じ様な理念を掲げている施設もたくさんあるので驚きはしなかったが、日本と違う所は、その理念の実現に向けての職員教育の徹底ぶりであった。

まず、採用時に、経営理念に沿える人かを見極め、特別なある一定以上の資格を有する者が採用条件だという。職員教育も各職分野毎にきちんと定められた管理システムがあり、そのシステムに沿った職員教育が行われる。だから、職員の統一も図りやすいとの事であった。

ここで、私の施設を振り返ってみた。私自身、新人職員が入ってきても、業務内容を教えるだけで精いっぱい、施設や所長が考えている方針について伝えられた事はあまりなかったように思う。もし、きちんと理念や方針を新しく入る職員に少しでも伝えられていれば、もっと職場間の業務の統一や職員の定着率も変わっていたのかもしれないと反省の念がわいた。

話を伺ったあと、施設内の見学に向かった。建物は6、7階建てになっており、6階の重度の入居者のいるフロアーに案内された。長い廊下が続いており、2人部屋、4人部屋を、8人部屋を見学したが、ベッドはリクライニング式ではなく、少し固そうなパイプベッドで、ベッド毎にカーテンで仕切られるようになっていた。脇にはポータブルトイレがあり、そこで排泄介助が行われていた。先ほどの手厚い職員配置の説明の割には、職員の姿が見えず、床がフローリングでという事もあり、なんだか寒そうな部屋の雰囲気を感じた。

中には、認知症の入居者もいて一生懸命同じことを繰り返し訴えてくる方が

いた。

次に、子供がいない自立度の高い方がいるフロアーに行った。先ほどの重度の方とは打って変わって、個室や2人部屋が多く、ベッドも木製の家庭で使われているようなベッドが並んでいた。ベッドの脇には、その入居者の趣味のものや写真等、色とりどりの物が飾られており、華やかな部屋だった。

それぞれ自宅から好きな物を持ってきたものや、この施設の趣味活動の時間に作ったものだという事だった。

ここで、デイサービスの職員として、どのような趣味活動やレクリエーションが行われているか質問してみた。

こちらの施設でもプログラムとして体操やレクリエーションが行われていて、その曜日に何が行われるかきちんと掲示板に貼って決められている。驚く事にほぼ毎日、琴やカラオケ教室や書道等専門的なボランティアの人が来て、自分の好きな趣味活動に取り組むことができるよう工夫されていた。

また、上海には日本のようにデイサービスセンターと定義付けされた施設はないという事だが、この施設の一階には、レクリエーションルームがあり、入居者以外の近所の人が気軽に訪れて、体操をしたりする、コミュニケーションの場になっていて、デイサービスセンターに近いシステムもあった。

最後に案内されたのが、心理療法を行う部屋だった。入居者だけでなく職員も訪れて、心理療法の医師にカウンセリングを受けることができるという部屋だ。ここまでくると、病院で入院するのとさほど変わらず、ここに入居している高齢者や職員にとって、困ることがあるのだろうかという疑問どころか、違和感さえ覚えるほどの恵まれた施設であると感じた。

上海のデイサービス機能について

デイサービスの職員として、上海市には日本のデイサービスのような機能があるのか、また、上海市の在宅の高齢者事情について学んだ事を述べていきたい。

上海市には、60歳以上の高齢者が266万人いて、全市人口の20%にあたり、上海市も日本と同様高齢化が深刻な問題となっているという。

中国の人は、基本的には自分の家族は最後まで自分の家族が、みるという考えを持っており、また、経済的に私達が見学した福利院に入れる人は一握りもみたくない。したがって、「介護」という概念がなく、在宅の高齢者向けの福祉サービス等の制度も整っていないのが現状だという。

今回、案内人のKさんに上海中心部に住む高齢者の現状やデイサービスのような機能があるのか話を伺い、また高齢者が住む典型的な集合住宅に案内していただいた。

まず、結論からいうと正式なデイサービスセンターというシステムは上海には整備されていないが、それに近い組織が存在するという事だ。

上海市中心部に住む高齢者に限らずほとんどの市民は、団地のようなあまり整備されていない何十棟も立ち並んでいる古びた集合住宅に住んでいる。その集合住宅の中で、同じ集合住宅内に住む人同士で、相互扶助の精神が芽生えており、孤独な高齢者の自宅に、他の住民が手伝いに来ているそうだ。

また、その集合住宅の一角に集会所みたいな場所があり、そこでデイサービスに近いような、その集合住宅に住む高齢者が集まってレクリエーションや体操をおこなうなど、コミュニケーションの場となっているそうだ。

また、最近では95万5千人の地域住民が参加している地域のボランティア組織もできており、集合住宅に住む高齢者の緊急支援を行ったり、ヘルパーのようなシステムが国レベルで制度化されたとの事であった。

デイサービスを職業とするのではなく、ボランティアに近い形で行っている事に驚きを感じたが、地域住民の相互扶助という考え方は、不安定な介護保険制度に頼っている私達も、改めて見直さなければならない考えだと深く感じた。

【終わりに】

最後に、この上海研修を振り返り、制限された環境や範囲内で、いかに工夫し、高齢者の為の介護実践していかなければならないかという事を痛切に感じた。

日本にいる福祉従事者である私自身、充実した設備や福祉用具等に慣れすぎて、毎日同じリズムで仕事をこなし、どうすればデイサービスのご利用者が満足できるかについての追求や工夫する努力を怠っていたように思う。

日本より環境が整っていない上海の市民は、相互扶助によって高齢者を最大限支えあっているように私には映った。この研修を通して、デイサービスの職員として今後、サービスの質を考え、今置かれた環境に満足するのではなく、職場全体の質の向上を考え、工夫できる職員になれるよう努力していきたい。

第二社会福祉院を見学して

特別養護老人ホームやよいほうむ
介護リーダー

上海中心都市部から車で少し離れた場所に位置する第二社会福祉院。入口を入ると、大きくスローガンが掲げられていた。意味は“すべては老人の為に、老人の為にすべてを捧げる”というもの。

この施設の規模はというと、入居者数 280 名、これに対し、スタッフは総勢 130 名という。入所形態は、日本でいう特別養護老人ホームと同じく、終身介護を行っている。

1 日のスタッフ人数は内 40 名。単純計算で、利用者 7 人に対しスタッフ 1 人という割合だ。人材の補充は十分整っていると感じられた。

中国(上海)では、こちらでいう要介護度は 4 段階に分けられている。入所はやはり重度な方を優先的に受け入れている様だ。しかし、日本と違うところと言えば、4 級の方が重度なのに対し、1、2、3 級の方はほぼ ADL も自立していて、むしろ、在宅での生活が可能の方だという。これは後に施設内を見学してみて、なるほどと思った。大抵の利用者が独歩可、食事も自立等、ADL の高さに驚かされた。

この施設での勤務体制は 5 つの部門に分けられており、業務担当(cw)、衛生担当(Ns・Dr)、後勤(バックアップ)、財務担当、事務担当となっている。各部門が一丸となり、ケアにあたっていた。

また、上海では各々の施設ごとがレベル分けされており、(1)市レベル(2)区レベル(3)民間レベルとがある。ここ第二社会福祉院は“区レベル”に相当する施設である。では一体何が違うのかというと、政府からどれだけの金額が助成されるかという点だ。レベルが高ければ高いほど、その設備は整っており、土地も広く、規模の大きさにただ驚かされる。ここ、第二社会福祉院でさえ、“市レベル”なのではないかと思うほど、規模が大きかった。

さて、いざ施設内を見学することとなり、まず見学したのは入所者 8 床の大部屋。この部屋は 24h、ほぼ寝たきりの方が生活されているところだという。しかし、仕切りはカーテンのみであり、むしろ病院の様だった。この形式の部屋が他、3 部屋あり、各部屋ごとに 1 人ずつの居室担当者がいるという。丁度お昼前ということもあり、介助内容は残念ながら見学することは出来なかった。が 1 つ、気になるところがあった。この部屋を見学したとき、介護スタッフは確かにいたが、1 人の利用者がベッド横の椅子に座っていながら、布切れのようなもので、腰から椅子の後部へ縛られており、身動きがとれなくなっていた。

その利用者は一生懸命立ち上がろうとしていたが、無論立ち上がれる訳もなく……。後に、ここの施設長へ、その件について伺ったところ、「立ち上がって転んだら危ないから」と、あっさりおっしゃられた。日本での“身体拘束廃止”について説明すると、そういった観念はこれまでなかった様子だった。スローガンである、“すべては老人の為に”はこういう形なのか、と疑問が残る出来事であった。

さて、話を戻し我々は個室専用の建物へ案内された。ここには個室がいくつもあり、1つ1つの部屋は広く、きれいに整理されており、さすが区レベルと感心させられた。全利用者の衣類、布団も全て政府からの助成でまかなったものだという。しかし、レベル分けは良く、かえてレベル間でその均等さに欠けるということがみられ、ましてや上海は未だ“措置”形式で入所が決まっていることから、利用者本位、意思尊重を考えているのかどうか、ここにも疑問が残った。

上海での主な入所理由は、“都市開発の為、住むところがなくなったから”というものがほとんどであり、このような背景が、ADLが高い方が多い、ということにも繋がっているのだと思う。

同じ福祉といえども、その国固有の現状があり、それによってその施設入所、また高齢者福祉の意味も大きく異なっているのだなあと感じた今回の研修であった。